

◎シリーズ 長岡京歴史散歩

(129)

長四小校区の遺跡
鎌倉時代の大規模な区画溝

平成13年の秋、友岡二丁目で行われた発掘調査によって、東西方向の大規模な溝が発見されました。溝は幅4畝、深さ1・1畝で、断面の形が逆台形をした立派なものです。この場所の西側と南側では、昭和56年にも発掘調査が行われており、ここでも大規模な南北溝が発見されていました。

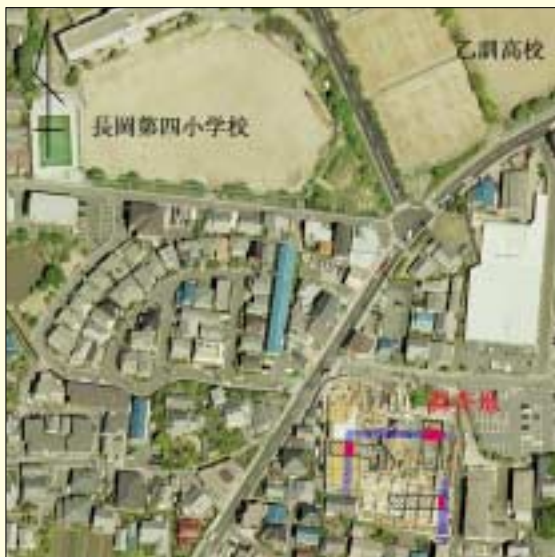
溝の規模や断面形態が同じであることから、昭和56年調査の南北溝が東へ折れ曲がって、今回の東西溝につながるものと考えられます。また、昭和56年の調査では、東側にもう一本の南北溝が発見されており、東西約43畝の範囲が大規模な溝で区画されていたこともわかってきました。南北溝からは鎌倉時代後半の遺物が出土しており、一連

の溝が埋没した時代を推定できます。

それでは、大規模な溝がなぜこの場所に作られたのでしょうか。「友岡」の名は明治時代以前は「とも岡」と書き、例えば平安時代の文献に「乙訓郡^{とも}鞆岡郷」としてその名が出てきます。また、鎌倉時代の文献には「とも岡庄」という荘園が記載されています。一方、発掘調査が行われた場所は、小字（町村内の地名）「屋敷」と呼ばれていました。現状ではまだ資料が不足していますが、この地に鎌倉時代の鞆岡郷や鞆岡庄の中心があつたとすれば、今回発見された大規模な溝は、鞆岡郷ないし鞆岡庄に関係する有力者の屋敷跡を区画する防御的な施設と考えることができます。



▶平成13年調査の溝（西から）
幅4 m、深さ1.1 m



▲調査地周辺の航空写真（14年3月撮影・上が北）
右下の斜線が調査地、赤色が見つかった溝、
青紫色は大規模な区画溝の想定範囲